

発行：1993年11月30日

寒冷地形談話会通信

▷事務局：〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学地理学研究室小泉武栄研究室気付
酒井 啓（研究生）

TEL：0423-25-2111（内）2429

FAX：0423-26-3920

▷寒冷地形談話会例会

12月4日（土）15：00～ 於東京大学理学部2号館

特集：極地・山岳の学術探検3

発表者：吉川虎雄氏（東京大学名誉教授）

「昭和30年代の南極観測隊（1次隊参加、6次隊隊長）の思い出

忘年会もやりますので、スライドを上映したい方はどうぞ

▷1994年のカレンダー・領布について

寒冷地形談話会名称入りの大雪山のカレンダー（一部1000円）を今年も頒布したいと存じます。お求めは、

①11月～12月の例会

②お茶の水の明治大学大学院309号室

担当：佐々木（TEL：03-3296-4333呼び出し）

③通販も扱います。代金+送料（250円）を下記へ振り込んでください。

郵便振替

東京4-665332

清水長正

以上、お問い合わせなど

TEL：03-5478-8324 清水長正まで

▷山岳研究气象台 1

“山岳研究气象台”は、山の研究に関する展望、評論、随筆などをつれづれなるままに書いていただく新コーナーです。

「寒冷」ばかりではお寒うござる

小口 高(東京大学理学部地理)

事務局の酒井君から「新コーナーが出来たので、忌憚のないご意見を投稿下さい」との依頼があったので、今村学郎¹⁾・谷津栄寿両先生流の「忌憚のない意見」を述べさせていただく。²⁾

「寒冷地形談話会」も発足20年とのこと、大変おめでたい限りである。近年、本会のメンバーにより『山の自然学入門』という本も出され、巷で好評を博していると聞く。このような好況に水を注すようで恐縮だが、思い切って会の名称を変えることを提案したい。日本人の山の研究者の集団を「寒冷地形談話会」と呼ぶのは、どうも片手落ちに思えてならない。

日本の山を特徴づけるものは、果して「寒冷地形」であろうか？確かに高山帯では我々の好奇心をくすぐるような美しい寒冷地形がみられる。しかし、世界の諸産地との比較のなかで、日本の山地の地形学的特徴を挙げるとすれば、それは残念ながら「寒冷地形」ではないだろう。むしろ、地すべり・崩壊・土石流等のプロセスで形成される地形こそが、「急峻なる山地に豪雨繁し」という日本の地形形成環境の象徴といえよう。

崩壊地形や土石流に関する研究では、日本は世界の最先端にあると言っても過言ではない。実際、この方面の世界的研究者であるT. Dunne やW. Dietrichが塚本良則・高橋 保・飯田智之らの研究を高く評価している。彼らがこのような評価を得ている原因は、彼らの優れた力量とともに、日本の山地における最適の研究テーマを選んでいるためであろう。一方、日本の寒冷地形の研究者の間では、相変わらず「海外礼賛」の風潮が見られるよう³⁾だ。この理由の一つとして地理学では明治以来の「輸入学問」がいまだ健在であることが挙げられる。もう一つの理由として、海外に対して頭があがらなりがちな研究テーマを、多数の人が選んでいることが挙げられる。つまり、日本の高山で永久凍土やペリグレの研究をやって、カナダや北欧の連中と対等に議論するためには、フィールドのハンディーを乗り越えなければならない。もちろん、日本のような「非典型的な」場所でこそ生まれる新たなアイディアもあるはずだが、これを発見するためには研究者に飛び抜けた力量が必要だと思う。一般的には「やはり海外の本場はすごい。ここに来ないと話にならない」ということになるのだろう。⁴⁾

さて、改めて『山の自然学入門』を眺めてみると、日本の山の地学的自然現象の解説としては、マス・ムーブメントに関する話が少なすぎるように思われる。⁵⁾たとえば、白神山地や箱根の地すべり地形の解説や、磐梯山や丹沢山地の崩壊の話は、あって然りだろう。『登山者に贈る高山帯稜線の寒冷地形学入門』というタイトルにす

れば、本の売れ行きは落ちただろうが、嘘がなかったと思う。

さて、一般にマス・ムーブメントの研究者は、現在の土砂移動プロセスを取り扱っている。今後、彼らの成果を山地の地形発達にも応用し、さらに発展させていく必要があるが、それが出来るのは地形発達史の研究者に他ならないと思う。私は、若い人に、このような問題に取り組んでほしいと希望している。それは、「日本の山地地形学を世界第一級のレベルに」という大きな夢の達成のための第一歩になるだろう。

そんなわけで、本会の名称から「寒冷」という親しみ深き枕詞を捨て、新たに「山地地形談話会」を発足させてみてはどうかと考えてみた。そこでは、高山帯の地形のみならず山地帯の地形をも取り上げ、氷河・周氷河地形ばかりではなくマス・ムーブメントや谷地形をも扱うことにする。これは我ながら名案かと思ったが、一つ大切なことを忘れていた。「山地地形談話会」という名称にすると、北海道東部のような低地の周氷河地形をやっている方が閉め出されかねない。そこで、いささか調子の良い話であるが、「山地地形・寒冷地形談話会」という中ボチ方式が妥当かと思う。しかし、20年来の寒冷地形談話会に愛着を持つ方からは、中ボチの前後の並びを逆にせよとお叱りを受けるかも知れない。さらに、いっそのことコーヒ・サロンみたいな「談話会」はやめて「研究会」と呼ぼうという意見もあろう。

私個人としては「談話会」でも「研究会」でもなく、どこかみたいに「連合」という名前にし、全員で黒服を着て登山道を集団暴走するのが良いと思っている。そうすれば、全国の突っ張り高校生が入会を希望し、やがては改心して真面目な山の研究者になってくれるのではないかと考えているが、いかがだろうか。

注：

- 1) ある人が私を「平成の今村学郎」と呼んでいるとの噂を聞いたが、私は「平成の三四郎」と呼ばれている柔道の古賀選手の方が好きだ。
- 2) 谷津先生によれば、健全な学問は健全な内部批判の下で発展する。
- 3) 健全^たといっても、不健全な健全^なである。
- 4) この件について、赤石のデータと外国とを比較されている松岡憲知氏の意見をお聞きたい。
- 5) このこの責任の一端は、「阿蘇山」の項で根子岳の崩壊については一言も触れずに、アースハンモックについて嬉々として書いてしまった自分にもある。

(文責：小口)

▷夏の~~上高地~~巡検報告（上高地自然史研究会と共催）

今年の8月20日～21日にかけて、上高地において巡検を開催しました。案内者は、石川慎吾氏（高知大・生物）、岩田修二氏（三重大・地理）、島津 弘氏（金沢大・地理）、真崎 庸氏（東京学芸大・学部・地理）の方々です。参加者は19名でした。石川、岩田両氏には上高地のヤナギ類、島津氏には河床礫からみた梓川、真崎氏には上高地におけるイワナの生態について話していただきました。案内者の方々と上高地自然史研究会事務局の山本信雄氏には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。

上高地における夏の巡検の感想

「梓川のケショウヤナギ林」

石川慎吾（高知大学理学部生物学科）

上高地自然史研究会の夏の巡検に参加させていただき、梓川のヤナギの植生を地形学の専門の方々と一緒に観察する機会が得られ楽しく有意義な一日を過ごすことができました。

ところで、私は上高地のヤナギ林に関しては実際に調査したことはなかったのですが、北海道の十勝平野のヤナギ林と景観的にも組成的にも非常によく似ている、というのが第一印象でした。生育しているヤナギの種類は、ケショウヤナギが最も多く、つぎにオオバヤナギ、エゾヤナギ（コエゾヤナギを含む）、オノエヤナギが最も多いのも北海道と同じです。オオバヤナギは西は鳥取県の大山まで分布しますが、ケショウヤナギとエゾヤナギは、本州では上高地にだけ（松本平の一部にも生育する）隔離分布するという事実は有名です。なぜ上高地にこれらの種が生き残ってきたのか、という謎を解くのは難しいことですが、上高地の自然と共にこれらの貴重な種を守っていかうという研究会の活動に共鳴し、その活動に参加させてもらうことにしました。

ケショウヤナギは、全体の比高が小さく、河道が網目状に分流する広い河床の砂礫質の立地に生育します。エゾヤナギもケショウヤナギとほぼ同様な立地に生育しますが、北海道での分布域はケショウヤナギよりも広く、石狩川流域でも大きな群落を見ることができます。オオバヤナギは河床が狭くなる更に上流にまで生育し、樹高が30m 近くにもなる大木も珍しくありません。

このような分布の違いを説明するためには、それぞれの種の生育環境と生態的特性を、生活史を追って詳細に調査、比較することが必要と考えられます。ヤナギ類は、河床の裸地に真っ先に侵入・定着して群落を発達させる、いわゆる先駆植物と言われる仲間です。特にケショウヤナギは直根性が強く、下方への根の生長速度が速い

ため、他のヤナギが侵入できないような乾燥した砂礫地においても、発芽し定着できる特性を備えています。このような先駆植物は一般的に耐陰性が低く、林床など他の植物の下では生育できませんが、ケショウヤナギは特にその傾向が強いと思われます。つまりケショウヤナギは、群落が安定し遷移が進んだ林では世代交代できません。そのためにケショウヤナギなどヤナギ類の生育地は、常に立地の破壊生成が繰り返される河辺に限られているわけです。

上高地は梓川の広々とした河床と周囲の山々との対比がとても美しく、20年ぶりに訪れた私の目にもやはり美しく映りました。しかし、河童橋ら徳沢に向かってしばらく歩くと、いたるところで河床がいじられていることは誰の目にも明らかでした。河床に様々な構造物が築かれ梓川が本来の動きを失うことは、ケショウヤナギにとって致命的になる、と研究会の方々は危惧しているわけです。ケショウヤナギの更新特性からみて、その危惧はもっともであるし、上高地の河床はケショウヤナギが生育していくためにはそんなに広くはないぞ、というのが私の率直な感想です。

今後、ケショウヤナギの保護を訴えていくためには、上高地全体のケショウヤナギ個体群が維持されている様式を定量的にとらえていくことが必要です。つまり、様々な樹齢の林分の生育地とその面積を調査し、それらの破壊される速度、ハルニレ林等他の群落に遷移していく速度、新しくできた裸地に侵入・定着し、新しい群落が形成される速度などを明らかにする必要があります。特に侵入・定着しやすい立地の特性の把握も重要で、ケショウヤナギが定着可能な裸地の割合と分布パターンも調べる必要があります。また、新しい群落が形成されるためには、その種子供給源となる成熟林分の分布なども重要になり、様々な樹齢の林分の分布パターンをとらえていくことも必要です。(文責：石川慎吾)